

西洋史研究者のためのパソコン活用入門～効率的情報活用のための7つの提言

古谷 大輔

はじめに

提言 1. 研究環境はソフトウェアやハードウェアの違いを意識せずに構築する

提言 2. USB メモリとオンライン・ストレージは研究作業の生命線である

提言 3. 研究環境の構築はリスクの分散に努めねばならない

提言 4. 研究環境の安全はコミュニケーション方法を一新して高める

提言 5. デスクトップ検索は情報管理の手法を革新する

提言 6. 効率的な研究環境は安価に確実に構築できる

提言 7. 論文執筆だけで研究を終わらせてはならない

おわりに

はじめに

『クリオ』誌上において、パーソナルコンピュータ（以下、パソコンと呼びます）を西洋史研究で初めて使おうと考えている人を対象に、ハードウェアやソフトウェアに関する初歩的な知識を整理した「西洋史研究者のためのパソコン活用入門」を前回執筆してから5年の月日が流れました。この文章はその5年の月日を補いながら、現時点での情報技術の成果を摂取しつつ、西洋史研究を進めるにあたって有用と思われるパソコン活用の技法を紹介するものです。

21世紀に入り、西洋史研究にパソコンを活用することはもはや当たり前のことになったかも知れません。しかし一つの研究を仕上げる過程で、綿密な情報探索を行って一次史料・二次文献を網羅的に収集し、それを丹念に読みこなし文献ノートをもとに論理的に整合性のある論文を執筆して、その成果を広く世に問うという一連の作業は、紙とペンの時代も、パソコンの時代も変わりはありません。（パソコンを利用した西洋史研究の一連の過程は、1999年に『クリオ』で紹介した「西洋史研究者のためのパソコン活用入門・実践編」を参考にしてください。）パソコンを用いれば研究作業のあらゆる問題が解決するといったような発想は幻想であり、パソコンはあくまでも研究作業を効率化するための道具に過ぎないということをはじめに述べておきます。

この5年の月日のなかで達成された私たちの日常をとりまく情報技術分野の革新は目を見張るものがあります。とりわけ常時接続可能な高速度のネットワーク環境が整備されたことは、大きな変化と言えるでしょう。世界中に広がるネットワーク環境に接続できれば、各地の図書館や文書館の情報データベースに気軽にアクセスできるようになりました。またネットワークを介せば、国内と国外の違いを問わずファイルを共有することができ、世界中どこにいても研究を継続できるようになりました。こうしたネットワーク環境のグローバルな普及によって、私たちが取り組む西洋史研究の精度と研究作業の効率を私たちは飛躍的に向上させうる可能性があります。

確かにネットワーク環境の普及によって、コンピュータウィルスの感染や Winny のようなファイル交換ソフトによる情報流失といった危険性も日々高まっていることは事実です。ま

た日本語ワードプロセッサやグラフィック加工ソフトなど、ライセンス料の高価なソフトウェアについて、不正コピーが横行していることも問題にもなっています。しかしながら、ネットワーク環境に対する適切な知識があるならば、限られた研究費のなかでもパソコンの可能性を十分に引き出しうる確実な研究環境を整備することができるはずで、そこで、この文章では可能な限り安価に、そして効率的に研究環境を構築しうる方策をいくつか提言していきます。

提言 1. 研究環境はソフトウェアやハードウェアの違いを意識せずに構築する

2006年現在、私たちがパソコンを活用する際に用いる OS については、Windows XP や Mac OS X、また一部ライセンス料が無料の Linux が主流になりました。それらのどの OS もこれまでの OS とは違って比較的動作も安定していますし、かつての「入門」で紹介した方法とほぼ同じ手法によって、比較的容易に多言語環境が整備できます。またこの5年の間には、こうした OS の違いはあっても共通の動作をするソフトウェアの普及も進みました。OS の違いを超えて動作に互換性のあるソフトウェア環境をクロスプラットフォームと呼びます。ブラウザソフトならば Firefox や Opera、電子メールソフトならば Thunderbird、ワープロ・表計算・プレゼンテーションソフトを含むオフィスソフトならば Microsoft Office や OpenOffice.org などがクロスプラットフォームに対応した代表的なソフトウェアです。(Mac OS X の場合には Neo Office/J という統合ソフトもあります。) これらのソフトウェアを用いれば、同名のソフトが扱うファイルに互換性があるため、OS の違いを超えてファイルを共有できる環境ができあがります。研究分野によっては、主流となる OS 環境に違いはあるでしょうが、こうしたクロスプラットフォームに対応したソフトウェアを用いれば、パソコンを選定する際に、「Windows にしようか、Mac にしようか」といったようなことで悩む必要は、ほぼなくなりました。また Microsoft Office を除いて、以上に紹介したソフトウェアは必要な場合に適宜ネットワーク上からダウンロードして、無償で使用できるという利点もあります。

西洋史研究に際してパソコンを選定する場合、OS 環境の違いの次に問題になるのは、ハードウェアのことでしょう。パソコンの心臓部に当たる中央演算処理装置の処理速度や、演算処理を円滑に行うためのメモリの容量、文書・画像ファイルなどを保存しておくハードディスクの容量は、西洋史研究を行うという目的に限定するならば、現在市販されているどのようなパソコンでも必要十分だと思われま。人文系研究の場合、もはやハードウェアの性能を基準にしてパソコンを選定する時代ではなくなったということです。そこで現在パソコンを購入する基準は、まず持ち運ぶ用途があるのかという観点から、デスクトップパソコンか、ラップトップパソコンかという選択に置かれるでしょう。学会や研究会などで効果的な研究成果報告を行うために、現在ではプレゼンテーションソフトウェアが活用されることが多くなりました。この点を考慮に入れるならば、もし一台だけパソコンが必要となる場合には、プレゼンテーションの現場に搬出できる光学式ドライブを内蔵したラップトップパソコンを選定すると良いでしょう。

デスクトップパソコンにせよ、ラップトップパソコンにせよ、長時間の研究作業に集中できる環境が確保されねばなりません。それゆえ、メモリやハードディスクといった基準よりは、むしろ液晶画面やキーボードといった直に自分の体と触れ合うインターフェースに基準

を置いて、各自がハードウェアを選択するべきだと考えます。とりわけ液晶画面については液晶のサイズではなく、一つの画面上に表示される情報量の多さを示す解像度を基準として選択するべきでしょう。また「はじめに」で述べたように、常時接続可能な高速度ネットワーク環境の恩恵に授かるためには、ネットワーク・インターフェースの搭載されたパソコンを用意せねばなりません。デスクトップパソコンの場合には有線接続に限られますが、ラップトップパソコンの場合には、無線LANに対応した機種を是非とも用意すべきです。

提言 2. USBメモリとオンライン・ストレージは研究作業の生命線である

現在のパソコンでは、デスクトップパソコンでも、ラップトップパソコンでも、DVDにデータを書き込むことのできるDVDマルチドライブやCD-Rにデータを書き込むことのできるDVD/CD-Rドライブなど、データを大量に複製できる光学式ドライブが搭載されているものが主流となりました。それに従い、かつてのように容量の限られたフロッピーディスクにファイルをコピーしてやりとりをする時代ではなくなりました。こうした光学式ドライブは比較的容量の少ない文書ファイルだけではなく、画像・動画・音声といったマルチメディアファイルを大量に複製することができます。それゆえに光学式ドライブによるファイル複製は、定期的に自らのパソコンに蓄積されたファイルのバックアップコピーを作成することに適した手段だと言えます。

しかしながら光学式ドライブによるファイル複製は、複製に比較的時間がかかることや、複製の最終過程でファイルの焼き付けの指定を怠ると複製に失敗するなど、気軽にファイル複製ができない問題点もあります。現在主流のパソコンでは、かつてのようなフロッピーディスクドライブが搭載されないものが多くなりました。そうした場合に、気軽にファイル複製を行うための手段として、USB接続形式のフラッシュメモリ（以後、USBメモリと呼びます）の使用を紹介することができます。USBメモリは小型で可搬性にすぐれ、256MBから1GB/2GBの容量をもち、大抵のファイルを気軽に複製して保存することができます。そして世界中で使用されているパソコンがUSBポートを搭載していて、Windows XPやMac OS XといったOSでは特段の作業もなく自動的に認識されるため、ほとんどどのようなパソコンとの間でもファイルのやりとりができることに最大の利点があります。パソコンは気軽に持ち運びができなくても、USBメモリに一時的にファイルを複製して持ち運べば、どこでも研究作業を継続できるというわけです。自分の研究環境にプリンタやフロッピーディスクドライブがなかったとしても、USBメモリを持ち込めば、印刷やファイルの複製、電子メールへのファイル添付を通じて、他者からのファイル提出の形式に応じたファイル交換が可能になります。（ただしWindows Me以前の古いOSを使用しているパソコンで認識させるには、特定のドライバソフトを導入する必要があります。）

USBメモリは小型ですが、そこに保存できる容量は限られていますし、それを常に携帯せねば使い物になりません。そうした問題を克服したい場合には、自らのパソコン環境（ローカルな環境）で作成・蓄積したファイルを、ネットワーク環境（リモートな環境）上に用意されたストレージ領域に複製しておき、ホームページを閲覧する際に利用するブラウザを使ってファイルを引き出すという方法が存在します。オンライン・ストレージという言い方はあまり馴染みがないかも知れませんが、実のところ、みなさんが電子メールを利用する場

合にも、電子メールをホストコンピュータ上に蓄積する際にそれは割り当てられています。電子メールに割り当てられたネットワーク上の領域を、ファイル保存用のストレージ領域として用いるには、FTP ソフトを使うなど、多少の技術的問題を克服する必要があります。しかしそうしたことをしなくても、最近では Justsystem 社の提供する InternetDisk や Yahoo! のブリーフサービスなど、大量の領域を使えるオンライン・ストレージ・サービスが提供されています。(ただし無償によるオンライン・ストレージ・サービスは、使用できる容量が少なくなります。) また Hotmail や Gmail のように、無償で提供されているオンライン電子メールサービスにおいて、作業中のファイルを添付して自分宛にメールを送付することによって、擬似的にオンライン・ストレージを構築することも可能です。こうしたオンライン・ストレージにファイルを保存しておけば、ネットワーク環境の整備されたところなら何処でもファイルを引き出すことができます。ローカルなパソコン環境に蓄積されていくファイル群を、一時的には USB メモリとオンライン・ストレージに保存し、定期的には光学式ドライブを使って DVD や CD-R にバックアップをとることが、世界中どこにいてもパソコンの不具合に左右されず、あるいは自分専用のパソコンが手元になかったとしても、確実な研究環境を保証する生命線であると言えます。

提言 3. 研究環境の構築はリスクの分散に努めねばならない

パソコンのハードウェアとソフトウェアがどれだけ進化しようとも、それは単なる機械に過ぎませんから、何らかの技術的問題が発生しうる可能性を常に想定して使用せねばなりません。従って、何らかの不具合が起きたときに即座に研究環境を再構築できる態勢を常に準備しておくことが肝要です。提言 2 において、ファイルのバックアップ手段として USB メモリとオンライン・ストレージの利用を紹介しました。しかしそれらは保存領域が限られているがゆえに、作業中のファイルを一時的にバックアップ保存するだけの手段であり、パソコンに何らかの不具合が起きた場合に、パソコンの環境を復元することを可能にする手立てとはなり得ません。(オンライン・ストレージの場合には、有償になりますが Apple 社の提供している .Mac (ドットマック) と呼ばれるサービスでは、パソコン環境の復元をも可能にするバックアップサービスが提供されています。)

最近のパソコンでは、デスクトップパソコンでも、ラップトップパソコンでも、何らかの不具合が発生したときに、購入時の初期出荷状態をパソコン本体だけで即座に復元できる機能が搭載されたものが多くなりました。また市販されているバックアップソフトを用いると、自分が構築したソフトウェア環境やファイル環境を DVD やハードディスクに保存し、問題が発生したときにそれらを読み込ませるだけで、バックアップをとった時点の環境に復元できるものもあります。しかしながら、こうしたバックアップソフトでは、複製をとった DVD やハードディスクを常に手元に置いておく必要があります。従って、海外滞在時など、手元にバックアップを取った DVD やハードディスクが存在しない場合に問題が起きたときには、全く意味をなさない手段になってしまいます。

研究環境を継続させるためにもっとも重要なことは、何らかの不具合が起きたとしても、即座にソフトウェア環境を再構築する手段を用意しておく、それまで蓄積してきたファイルを復元することにあります。そのための最も安価にして確実な手段は、第一にネットワーク

上に提供されている無償のクロスプラットフォームに対応したソフトウェアを利用することによって即座に研究環境を構築し、第二に研究作業の過程で蓄積してきたファイルを様々なストレージ媒体に複数のバックアップを用意しておくことです。無償で提供されているクロスプラットフォームのソフトウェアは、ライセンス問題を回避して安価な研究環境を構築するという意味だけではなく、少なくともパソコンをそれだけで初期出荷状態にまで復元してネットワークに接続可能な状態にまでもっていければ、ネットワーク上で配布されているソフトウェアを導入することによって研究環境を再構築できるという利点があるのです。例えば、ワープロや表計算、プレゼンテーションソフトならば、高価な Microsoft 社の Office をあえて導入するまでもなく、ネットワーク上の OpenOffice.org のサイトから OpenOffice.org をダウンロードして導入することで、不測の事態にも十分に対処可能です。なぜならば、OpenOffice.org は無償配布されているソフトウェアであるにもかかわらず、PDF ファイルの閲覧・作成機能を持ち、Microsoft 社の Word/Excel/PowerPoint と互換性があるソフトウェアだからです。Windows XP でも、Mac OS X でも初期出荷の状態でブラウザソフトや電子メールソフト、テキストファイルを編集できるソフトは搭載されています。ですから、不測の事態に一時的に必要なソフトとしては OpenOffice.org を導入すれば十分に事足りるでしょう。あとは USB メモリやオンライン・ストレージなどに保存しておいた作業ファイルを複製するだけで、研究作業を続行させることが可能になります。

提言 4. 研究環境の安全はコミュニケーション方法を一新して高める

パソコンを活用した西洋史研究作法が、文献情報検索や研究者間のコミュニケーション手段としてネットワークを多用するようになればなるほど、現今のネットワーク環境に懐胎するリスクに接する可能性が高くなっていることは言うまでもありません。そうした意味からも、提言 3 に示した手法で私たちはリスクを分散させる研究環境を構築せねばなりません。今や日常的な存在となったコンピュータウイルスに対しては、あらかじめアンチウイルスソフトやファイヤーウォールソフトを各自が導入することが、ネットワークを利用する者の最低限のマナーです。無償のアンチウイルスソフトとして、ここでは Grisoft 社の AVG Anti-Virus Free Edition を紹介します。また常時ネットワーク接続が当たり前となった現在、ローカルなパソコン環境に密かに進入して内部情報をネットワークへ流出させるスパイウェアの危険性も高まっています。そうしたスパイウェアを検知する無償のソフトウェアとして、ここでは Ad-Aware SE Personal Edition を紹介します。しかしながら、現今のネットワーク環境にあっては、そうした自衛策を講じていたとしても、それだけではもはや万全とは言えません。例えば、毎日多数寄せられる自分の身に覚えのない迷惑メールに辟易としている人も少なくはないでしょう。こうした問題の根源には、ネットワーク上のコミュニケーション・ツールとして電子メールソフトの使用が墨守されていることに一つの理由を見いだすことができます。

インターネットの草創期以来、Internet Explorer や Firefox に代表されるブラウザソフトについてはセキュリティ問題から様々な変化が加えられ、技術的発展が継続されています。しかしながら、電子メールはほぼ十数年前に構築されたシステムが維持されたまま、現在に至っています。日進月歩のコンピュータ技術の世界にあって、私たちはなぜ電子メールという手段だけを墨守し続ける必要があるのでしょうか。今や古典的な電子メールという手段は、膨

大な迷惑メールやそのなかに潜むウィルスメールの存在によって、確実なコミュニケーション手段として機能なくなっています。古典的な電子メールの最大の欠点は、サーバーに蓄積されたメールの数々をローカルなパソコン環境に逐一読み込む形式に求められます。それゆえにウィルスメールに皆さんのパソコンが感染する問題も起きるわけです。こうした問題を未然に防ぐには、ローカルなパソコン環境へ極力怪しいメールを取り込まずにメールを確認できる術を確立すべきでしょう。一つの対策としては、Gmail や Hotmail に代表されるような迷惑メールフィルターの強力なオンライン電子メールサービスを用いる手法を紹介できます。Gmail のようなオンライン電子メールサービスは、取得したユーザアカウントに提供されるストレージ領域が広大ということもあって、提言2に紹介したようなオンライン・ストレージとして応用することも可能です。

また、すべての連絡事項を電子メールで伝達しようとするコミュニケーション習慣を改める時が到来しているのだと考える必要もあるでしょう。ネットワーク環境を多用することによって高まるリスクは、コミュニケーションの目的に応じた手段の使い分けによって分散させることができます。例えば、同じ大学・研究室に属する者の中で日常の些末な伝達事項を伝えるだけならば、MSN メッセンジャーといったメッセンジャーソフトを使えば十分でしょう。また各自の仕事に関する日報や備忘録は、カレンダー上に記事を登録できるブログを活用することで対応可能です。研究者の間や教員と学生の間でブログ上の日報を共有することは、電子メールによって日程を回覧することを回避する手段になります。研究会やゼミ、ワーキンググループなどでのプロジェクト形成においてメーリングリストを使う手段も、スパムメールを誘発する可能性があるので回避すべきでしょう。プロジェクト形成を目的としたコミュニケーション手段としては、ブラウザ上で動作する Wiki システムを活用することをお勧めします。Wiki システムとは、ブラウザソフトを利用してネットワーク上のハイパーテキスト文書を書き換えるシステムで、それへの参加者はネットワーク上のどこからも文書を書き換えができるため、共同作業で文書を作成する目的に適したシステムです。このシステムならば、複数の参加者によって Web サイトを更新することができ、あたかもネット上のホワイトボードとして情報を更新・蓄積・共有可能になります。

提言 5. デスクトップ検索は情報管理の手法を革新する

パソコンを活用した西洋史研究の出発点は、今やネットワーク上に広大に広がる情報データベースの検索に始まることは言うまでもありません。各国、各地域の図書館、文書館などが公開する書誌情報の検索から、デジタルデータ化された史・資料群の探索まで、ブラウザソフトを介して私たちが得られる情報は多岐に渡ります。また最近では従来紙媒体にだけ限られた辞書や事典といった各種のレファレンスツールもネットワーク上に多数公開されており、私たちは世界中のどこにいたとしても、ネットワーク環境に接続しているならば、その恩恵を預かれるようになりました。これら情報データベースの公開は有償である場合と無償である場合があり、有償であるものは高額なライセンス料の支払いが必要となります。そうしたライセンス料は個人の研究者が負担できる範囲を超える場合が多く、今後我が国の西洋史学界がその水準を高めようとするならば、すべての研究者がその恩恵に預かれるよう学界全体として取り組むべき課題の一つになるでしょう。

ところでこうしたデジタルデータを積極的に利用することの最大の利点は、デジタルデータの特性を活かして、効率的に情報検索できる点にあります。ここで言うデジタルデータの特性とは、文字・画像・音声・動画といった表現形式の違いを0と1の二進法の世界にすべてを置き換えてしまうことです。パソコンの世界では、0と1の二進法の世界にあらゆる情報を均質化することによって、文字・画像・音声・動画といった表現形式の違いを超えて、目的の情報を一様に検索することが可能になるのです。この点は、紙を媒体とした従来の情報収集のあり方と根本的に異なる点です。

近年、こうした情報検索の特性を活かしたデスクトップ検索と呼ばれる検索ツールが公開されるようになりました。代表的な検索ツールは、Windows XPではGoogleデスクトップやWindowsデスクトップサーチ、Mac OS XではOSに標準で付加されているSpotlight検索です。これらのデスクトップ検索ツールは、ローカルなパソコン環境に蓄積されているメールデータ、メディアファイル、テキストファイル、Word/Excel/PowerPointファイル、PDFファイルなどに包含された情報からあらかじめインデックスを作成した後、ファイル内部のキーワードを直接検索する機能をもっています。またこれらの検索ツールはブラウザソフトに追加することのできる検索ツールと同様に、ネットワーク上に公開されている情報も同時に検索することが可能です。つまりローカルなパソコン環境とリモートなネットワーク環境の違いを意識することなく、あらゆるデジタルデータを一挙に検索できる点に最大の利点があります。

ファイル名だけでなく、その文書内に書かれた内容についてキーワード検索ができるということは、これまでの情報整理のあり方を一変させる可能性があります。つまりファイルをフォルダ毎に整理していなくても、後から適切なキーワードを打ち込むだけで目的のファイルへ辿り着くことができるのです。最近では、PDFファイルを媒体とした電子ジャーナルとして研究論文が公開される場合も多くなりました。またドキュメントスキャナを用いて、紙媒体による史・資料をPDFファイルに変換し、ローカルなパソコン環境で一元的に文書管理をする人も多いでしょう。あるいは高解像度の画像撮影が可能なデジタルカメラを利用して史・資料を撮影し、JPEGなどの形式で保存された画像ファイルをPDFファイルに変換して管理されている方もいるでしょう。この新たな文書管理方法において共通する点は、あらゆる文書データをPDFファイルに変換して一元的に管理するということです。なぜならば、PDFファイルの作成と管理を行う場合、OCR機能を併用してテキスト認識を同時に行っておけば、先に紹介したデスクトップ検索ツールを活用することによって、目的のキーワードについて言及された史・資料へ瞬時に到達することができるからです。既存の紙媒体による文献をPDFファイルとして一元的に管理する手法は、紙資源の無駄遣いを回避するだけではなく、デスクトップ検索ツールを併用することによって研究作業の大幅な効率化をもたらす可能性を秘めています。

提言 6. 効率的な研究環境は安価に確実に構築できる

ネットワークを活用して効率的に情報収集を行った後には、逐一丁寧に文献メモをとって、その情報を基に論文執筆へと至ります。最近では、多くの人がパソコンを利用しながら着実に業績をあげられていますが、周りを見回してみるとMicrosoft Wordくらいしか活用してい

ないという人を意外と多く見かけます。もちろんそれでも良い訳ですが、Microsoft 社の Office はときたま不安定な挙動に陥ることが多く、しかもそうした不具合の多くは、プラットフォームである Windows XP など OS そのものを巻き込む場合が多いものです。Microsoft 社の Office に一切を任せていたばかりに OS さえも挙動が怪しくなり、作りかけの文章が水泡に帰した経験は誰しもあるのではないのでしょうか。つまり Microsoft 社の Office だけに依存した研究環境では、大きいリスクを抱えたまま作業を続けなければならない、しかもそれは不確実なソリューションであるにかかわらず、人文系研究者にとっては法外と思えるほどに高価だという問題もあります。

技術的な不具合と隣り合わせのパソコンを用いて確実な研究環境を構築するには、提言 3 で紹介したように、可能な限りリスク分散型の環境構築に努めるしか手はありません。提言 3 では、各種の作業ファイルを分散して保存する方法を紹介しましたが、リスク分散型の研究環境を構築するという観点から文献メモと論文執筆の方法を紹介するならば、可能な限りテキストエディタで文献ノートや論文の執筆を書きすすめ、論文脱稿の最終段階になってはじめてワープロソフトを用いて文章を整形するという手法を紹介できます。最近では Em Editor Free のように多彩な文字コードに対応したテキストエディタを無償で利用することができるようになりました。テキストエディタでは、それぞれのテーマに応じてかつての京大式カードのようにメモをとっていけば良いわけです。史料メモについては日本語と外国語を混在させるのではなく、テーマ別に日本語、スウェーデン語...という風に言語をわけて整理すると、文字コードの問題に悩まされることなくノートを取ることができます。膨大な数に及ぶ文献ノートは、提言 5 で紹介したデスクトップ検索ツールを用いれば、言語の如何を問わず瞬時に同一のキーワードを含むファイルがブラウザ上にピックアップされます。デスクトップ検索ツールの利点は、多言語でキーワード検索が可能だということにもあります。論文執筆の段階ではこの機能を活用して適宜必要なキーワードを設定し、膨大な数に昇る文献ノートの中から該当する内容をピックアップしていけば、効率的な文章作成も可能になるでしょう。あとは論文執筆の最終過程でワープロソフトを起動し、脚注などを含めて文章を整形するにすれば、文章執筆におけるリスクも回避できるでしょう。

論文執筆に絡む最大の問題は、Microsoft 社の Word ファイルで論文原稿の提出を求められる場合が多々あるということです。あらゆる研究者が高価な Word を購入していて、それを使用しているならば問題はないでしょう。しかし現実には、研究に費やせる資金の条件に応じて、皆が等しいパソコン環境にあるとは言えません。高額なソフトウェアの使用をデファクトスタンダードとするような慣行の蔓延が、例えばソフトウェアの不正コピーを誘発する理由の一端を担っているとさえ考えられます。実際のところ、編集作業の過程で校正が必要な文書の提出については、テキストファイルによるデジタルデータの提出と紙媒体に印字されたハードコピーの提出を併用することによって十分事足りるはずで、つまりテキストファイルによって提出された文章の内容をもとに、脚注や特殊文字などの指示については紙そのものに出力されたハードコピーで補完して確認すればよいわけです。ハードコピーによる論文提出は、脚注や特殊文字の表記を正確に埋め込んで印刷することができる PDF ファイルでも十分に代替可能でもあります。Word の使用が強制されない環境ならば、ワープロソフトは文章整形さえできればよいということになります。それは Justsystem 社の一太郎でも、無償の OpenOffice.org でも構わないということになり、研究者が費用の条件に応じて研究環境を

柔軟に構築しうる可能性も開けます。

テキストエディタを用いた文献ノートと論文執筆を推奨する理由は、Office のリスクを回避するためだけに止まりません。研究費に余裕がなく Microsoft 社の Office が手元にない場合でも、テキストファイルに蓄積されたデジタルデータならば、提言 5 で紹介したデスクトップ検索の恩恵に預かることができるからです。私たちは、Microsoft 社や Adobe 社が提供する高額なソフトウェアに依存しなくとも、効率的な研究環境を構築することができます。ワープロ・表計算・プレゼンテーションソフトは Microsoft 社の Office ファイルと高い互換性をもった OpenOffice.org を導入すれば事足りるでしょう。OpenOffice.org には、Microsoft Office にない機能として PDF 作成機能があらかじめ搭載されているという利点さえあります。PDF ファイルの作成は論文の完成原稿の提出フォーマットとして、紙媒体によるハードコピーに代わって普及する可能性があります。最低限の PDF ファイル出力機能で良ければ、高額な Adobe 社の Acrobat を購入しなくても OpenOffice.org だけで対応可能です。すでにヨーロッパのいくつかの大学では、OpenOffice.org に代表されるような無償のソフトウェアを導入することで、不正コピーへの対処と研究環境のコスト削減に取り組んでいるという話も聞きます。

私たちが安価にして確実な研究環境を構築しようとするならば、ここまで繰り返し紹介してきた OpenOffice.org の他にも、テキストエディタならば Em Editor Free、光学文字認識ソフトならば日本語と英語に認識言語は限られますが Smart OCR Lite Edition、画像加工・管理ソフトならば Google の提供する Picasa、セキュリティ設定などでより高度な PDF ファイルの作成を望むならばクセロ PDF や Primo PDF といったソフトウェアを紹介できます。ここに紹介したいずれのソフトウェアも適宜ネットワーク上からダウンロードして、無償で使うことができ、私たちが西洋史研究を行ううえでは十分な機能を有しています。工夫次第で私たちの知的作業に必要な研究環境を、安価に確実に整えることは十分に可能なのです。

提言 7. 論文執筆だけで研究を終わらせてはならない

私たちの研究活動は、論文を完成させただけで終わるわけではありません。私たちは活字媒体に研究論文を公開することはもちろんですが、国内外の学会や研究会で自らの研究成果を積極的に公表していかねばなりません。そうしたときにプレゼンテーションソフトを用いた研究報告は、効果的な研究成果公開の手法となりえます。我が国の学会や研究会での研究報告において、プレゼンテーションソフトを活用した報告はいまだ普及しているとは言えませんが、欧米の研究者の間ではプレゼンテーションソフトを活用して研究報告をすることが多くなっています。もちろんここでプレゼンテーションソフトを用いた研究報告が万能だと断言するわけではなく、従来通りの紙媒体によるハンドアウトを配布した研究報告のスタイルも、時と場合に応じては効果的である場合もあります。ですから、私たちは報告しようとする研究内容とそれを報告する場の状況に応じて、適当な報告スタイルを選択すべきだと言えます。

ここで紹介するプレゼンテーションソフトとは、Microsoft 社の PowerPoint や OpenOffice.org に含まれる Impress、Apple 社の iWork に含まれる Keynote などのソフトウェアのことです。これらのプレゼンテーションソフトでは、各スライドのレイアウトとデザインを決定し、各々のスライドにテキストや画像を埋め込む過程を繰り返すことで、一連のスライドショーを完

成させる過程を辿ります。いわば电脑版紙芝居を作成するというわけですが、単なる紙芝居と異なる点は、強調させたいテキストや画像にアニメーション効果を設定することによって、聴衆の視覚に訴えるスライドを作成できる点にあります。しかしながら、そうしたアニメーション効果を用いたスライドショーを作成したとしても、日本人研究者の場合、従来のハンドアウトの流儀に従ってテキスト主体のスライドを作成してしまう傾向があるようです。そのようなテキスト主体のスライドを作成しまうと、聴衆はテキストが溢れるスライドにばかり目を奪われてしまい、研究報告の主体である報告者の存在が忘れ去られてしまうといった本末転倒な事態に陥ってしまいます。

効果的なプレゼンテーションを行うためには、各々のスライドに含まれるテキストや画像を最低限に抑え、アニメーション効果も必要最小限に抑制して、シンプルなスライドショーを作成すると良いでしょう。研究報告の主体はあくまでも報告者自身であり、スライドショーではありません。ですから、常に聴衆の視線が報告者へと向かうプレゼンテーションの構築に努める必要があります。研究報告の場において、報告者と聴衆が話題を効果的に共有するためには、ただ単にあらかじめ準備したスライドショーを垂れ流すだけではなく、報告の現場でラップトップパソコンに表示されたスライドに補足的な情報を追加するなどして、臨場感を高めるといった工夫も考えられます。しかしながら、研究報告の舞台は動的なプレゼンテーションが可能な場合と、静的なプレゼンテーションが好ましい場合とに分かれます。プレゼンテーションソフトを用いた研究報告は、得てして報告者がオーバーアクションになりがちになる傾向もありますので、自らが研究報告に臨む舞台にどのような報告スタイルが適しているのか判断する必要があります。

最終的には研究報告の善し悪しが、スライドショーによって眩惑させられるものであつてはなりません。研究報告のスタイルが時代とともに紙からプレゼンテーションソフトへ変わったとしても、その善し悪しは報告の内容そのものと報告者の話法によって決定されるものであることに変わりはありません。従って、プレゼンテーションソフトを用いた研究報告を用意する際には、聴衆に対して効果的な印象を与えるスライドショーの作成に努める一方で、プレゼンテーションの核となる報告原稿も周到に準備せねばなりません。プレゼンテーションソフトでは、各々のスライドを作成する際にノートを書き加える項目があります。ここに各々のスライドの内容に応じた報告原稿を記述しておく、PowerPoint ならば発表者ツール、Keynote ならば発表者ディスプレイと呼ばれる機能を使って、報告の経過時間を確認しながら、報告原稿そのものを閲覧することができます。ただしそれを実現させるためには、プレゼンテーションに使うラップトップパソコンが複数のディスプレイ表示に対応している必要があります。ラップトップパソコンとプロジェクタの両方に同じ画面を表示させることをクローンモード、パソコンとプロジェクタの画面を別々に表示させることをデュアルディスプレイモードと呼びます。プレゼンテーションソフトを用いた研究報告を行う際には、後者を選択してプロジェクタ側にスライドショーを出力しておき、ラップトップパソコン側に発表者ツールや発表者ディスプレイを別個に表示させて臨むと、より効果的な報告を実現することができます。

おわりに

以上、常時接続可能な高速ネットワーク環境が日常的になった現在において、パソコンを西洋史研究に効率的に活用するための7つの提言を整理しました。パソコンはパーソナルな道具であることから、ネットワーク環境と切り離して用いる道具のように思われがちです。しかしながら、そこに秘められた情報処理能力の可能性を十全に引き出すためには、今やネットワーク環境との連動が必要不可欠です。インターネットの結ぶ広大な情報空間から文献情報や研究情報を検索することはもちろん、オンライン・ストレージを使ったバックアップや、ネットワーク上で無償配布されているクロスプラットフォームに対応したソフトウェアを活用すれば、安価ながら効率的な研究環境を確実に構築することが可能になります。

しかしながら、昨今、一部の国立大学法人において発覚したソフトウェアの不正コピーが大きな問題になっています。他人の著作権に対してもっとも慎重に、真摯にならねばならない学問の府で、このような事態が起きるとは言語道断です。問題の要は、不正コピーなど構わないだろうといったような知的著作権への安直な、不誠実な態度が蔓延していることです。最近韓国や日本の大学で研究の捏造問題も話題になりましたが、他人にはわからないから嘘をついても構わないといった態度は厳に戒められねばなりません。不正コピーの問題は重大な著作権侵害にあたり、それは剽窃行為と同等とも言う悪事です。それが、本来他人の業績に敬意を表しながら知を生産すべき学問の府で横行しているというのですから深刻です。研究費で賄えないならばコンピュータを使うなどまでは言いません。しかし著作権侵害や剽窃行為に何のためらいもないとするならば、コンピュータを使う資格、あるいは学問に携わる資格はないと断言します。

常時接続可能なネットワーク環境のもとでパソコンの使用が当たり前になった現在、不正コピーやコンピュータウィルスなどの問題が高まっていることは事実です。しかし私たちはブログをはじめとしてネットワーク上なら誰もが表現者となりうる手段を得たことで、広大なネットワーク空間の中にお互いの知恵を結集させうる可能性をも手にしたのだと言えます。ネットワーク環境に支えられたデジタルワールドの展開によって、私たちの文化と社会が再び無文字の時代へと回帰し、文字史料に裏付けられた歴史学は衰退せざるを得ないと危惧する声もあります。しかしこの文章では、いかにしてパソコンという道具を西洋史研究における効率的な情報活用手段として活用しうるのかという技術的な問題に限定して、筆者なりの知恵を提供しました。というのも、西洋史研究をめぐる研究環境の技術的問題を克服し、新たな可能性を見出すためにそうした知恵を集約していこうとする『クリオ』編集部意向に、筆者が賛同したからです。それぞれの提言については、紙幅の制限から具体的な作業過程を省略せざるを得ませんでした。そうした個別の問題や、筆者だけでは思い至らなかった技法や有益な知恵については、筆者が公開しているブログ（古谷大輔（歴史学・北欧史）のブログ <http://gustav.air-nifty.com>）にてご発言頂ければ、さらに議論を発展できると考えています。現今のネットワーク環境がもたらした最大の利点は、実のところ、そうした研究者間のシナジー効果によってもたらされる研究スタイルの革新にこそあると思います。『クリオ』誌上に公開されるこの文章が、西洋史研究にパソコンを活用したいと考えているすべての方々にとって、ささやかな手助けとなれば幸いです。

本文中で紹介したソフトウェア等の参考 URL

(以下の URL は 2006 年 3 月 20 日現在のものです。)

Ad-Aware SE Personal Edition <http://www.lavasoft.de>

(無償で使用可能なスパイウェア監視ソフト。Windows 版。)

AVG Anti-Virus Free Edition <http://free.grisoft.com/doc/1>

(無償で使用可能なアンチウイルスソフト。Windows 版。)

Em Editor Free <http://www.emeditor.com/jp/>

(無償で使用可能なテキストエディタ。Windows 版。)

Firefox <http://www.mozilla-japan.org/products/firefox/>

(無償で使用可能なブラウザソフト。各 OS 版あり。)

Gmail <http://gmail.google.com>

(無償で使用可能なオンライン電子メールサービス。ただしライセンスの取得には既使用者からの紹介メールが必要。)

Google デスクトップ検索 <http://desktop.google.co.jp/?promo=app-gds-jp-v1-1>

(無償で使用可能なデスクトップ検索ツール。Windows 版。)

Neo Office/J <http://www.planamesa.com/neojava/ja/>

(無償で使用可能なワープロ・表計算・プレゼンテーション統合ソフト。Mac OS X 版。)

Open Office.org <http://ja.openoffice.org>

(無償で使用可能なワープロ・表計算・プレゼンテーション統合ソフト。各 OS 版あり。)

Opera <http://www.jp.opera.com>

(無償で使用可能なブラウザ・電子メール統合ソフト。各 OS 版あり。)

Picasa <http://picasa.google.co.jp>

(無償で使用可能な画像整理・加工ソフト。Windows 版。)

Primo PDF <http://www.primopdf.com>

(無償で使用可能な PDF ファイル作成ソフト。Windows 版。)

Smart OCR Lite Edition http://www.smartread.biz/SmartOCR1.0/Lite/lite_index.html

(無償で使用可能な光学文字認識ソフト。Windows 版。)

Thunderbird <http://www.mozilla-japan.org/products/thunderbird/>

(無償で使用可能な電子メールソフト。各 OS 版あり。)

Windows デスクトップサーチ (MSN サーチツールバー with Windows デスクトップサーチ)

<http://desktop.msn.co.jp>

(無償で使用可能なデスクトップ検索ツール)

クセロ PDF <http://xelo.jp/xelopdf/>

(無償で使用可能な PDF ファイル作成ソフト)